







冬牡丹 卒一  
葱 卒二  
根深  
生薑  
鷹野

冬之下

極月 卒四  
師走  
臘八  
衣配  
寒鳥  
鷹  
納豆  
寒菊  
湯  
紙衣 卒七  
蒲團  
足袋  
寒山  
寒梅 卒八  
冬田  
冬椿 卒九  
冬蠅  
寒雨  
寒聲  
佛必會 卒五  
寒念佛 卒六

煤掃  
餅搗 卒十一  
歲暮 卒十二  
曆賣  
古曆  
枱賣  
節分  
豆打  
年市  
年總  
年用意 卒十三  
年木樵  
年木  
年尾  
年越  
行年  
年宵  
年一夜 卒十四  
惜年  
年名殘  
厄拂  
掛取  
固見  
春隣 卒十五  
春待  
春近  
年内春  
冬題不知

冬

類題十萬句集初編冬之部上

洞海舎谷編  
一具菴一具校合

十月

十月や花より花さるる甚必  
 十月や鐘の形成る如查の本  
 十月を新ふとさるる暇より  
 十月の空を赤く染めしる  
 十月や秋の鳥を鳴らし  
 十月や立々民士の教ふあり  
 十月や日をも交へてゆく所

多喜  
大梅  
文海  
宗井  
芦帆  
二兵  
一南

冬



小春  
小六日

あまのそらを眺め小春  
清きく桐の葉をいん小春  
桐葉の陽をのく小春  
あまの目もさる小春の夕  
石白の月も初春も小春  
年尚よ清の白小春  
く雪の近を通る小春  
柔らかなる小春  
産駒の斗をいん小春  
桐葉の屋敷をいん小春  
山陰の松をいん小春

今 不 尚 一 女 古 旭  
今 不 尚 一 女 古 旭  
今 不 尚 一 女 古 旭

初冬

あまのそらを眺め小春  
清きく桐の葉をいん小春  
桐葉の陽をのく小春  
あまの目もさる小春の夕  
石白の月も初春も小春  
年尚よ清の白小春  
く雪の近を通る小春  
柔らかなる小春  
産駒の斗をいん小春  
桐葉の屋敷をいん小春  
山陰の松をいん小春

今 不 尚 一 女 古 旭  
今 不 尚 一 女 古 旭  
今 不 尚 一 女 古 旭

冬







ある所の事なりてゆく十本  
耳よりく十本の証や娘号を  
素好子とよむの安る十本  
足家控て殿とよむ十本  
名仙ゆけ十本の所の種  
片もよむ安る十本  
さるゆもかて十本  
つきの継事とよむ十本  
海人多れとよむ十本  
十本とよむ活系とよむ十本  
毛鼻とよむ安る十本

考  
天  
田  
吟  
遷  
月  
史  
杜  
棠  
玉  
云

夷講

耳の元の新法言十本  
始事とよむ十本  
本とよむ安る十本  
炭片とよむ十本  
指針も指針も白ふ十本  
撞木も撞木も白ふ十本  
床の片とよむ安る十本  
夷講種とよむ十本  
秋とよむ安る十本  
一とよむ安る十本  
新法とよむ安る十本

龍  
一  
今  
雲  
震  
斗  
古  
種  
二  
不  
迦

吾子牡丹枝う〜冬の日  
雪解の李白も亦これ春  
跡上る松の方廣〜春  
雪の日は春持し〜怪  
僧の雪信言中〜  
此を〜  
在河を春流し〜  
何れも解於世も春  
秋立の紅緑も春  
舟の柳も物も春  
籬のけしは春

永  
西  
木  
曾  
一  
下  
友  
左  
五  
紫

初時雨

絶了の切も味〜  
秋の暖も春も  
川も春も  
舟も春も  
初時雨の  
雪解の  
舟の柳も  
籬のけしは

川  
稻  
丈  
丈  
乙  
乙  
右  
杜  
山

冬

時雨

春後しつと秋の風寒や神はれ  
葉もまらぬ木の葉ひらり初時雨  
舟の帆も松も舟も初時雨  
舟玉の初時雨も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨

雲也 甲子 栗笑 幻芝 峰洋 札月 木公 自露 廻空 栲花

時雨の向の星を傳ひあふれが  
舟の山孔神の雲も初時雨  
舟の兄雲も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨  
舟も松も舟も初時雨

栲海 蒼夫 雲竹 雨竹 玉和久 赤藜 古翠 川丈 三丁 旭丘 無人

日傍を時をよまけり藤の松  
面をうらねり来りしれり  
志をいふ松も志をぬ松も  
松くしれ松くしれ時を  
相のそ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を

如仙  
不曲  
高曲  
不曲  
高曲  
不曲  
高曲  
不曲  
高曲  
不曲

志をいふ松も志をぬ松も  
松くしれ松くしれ時を  
相のそ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を  
松くしれ松くしれ時を

松井  
今  
片子  
馬湖  
多由女  
久藏  
范父  
信女  
無人  
無林  
斗筵

冬

為世

一竹舟にそるつゝや屋敷の  
香の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも

大 貴  
龍 田  
后 海  
竹 若  
五 風  
一 子  
一 具  
然 然

〇九

冬

竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも  
あつゝや包の匂いも  
竹の匂いも此の匂いも

竹 子  
涼 谷  
今  
双 二  
竹 葉  
白 子  
竹 子  
荷 乙  
其 笑







舟の霜も枯れりともさぬ嵐うな  
石臼の地初を去りたる霜おが  
生母の病や霜おの枯るゆり  
霜おや枯るもはるく淡の削  
あもるをいよく真一霜の志  
海川の霜も枯るも菜屑が  
ろしと霜踏おの舟場が  
霜の戸や親子の舟のうけ交  
薪ももおの舟もや尾の霜  
舟の舟ん戸もはる霜おが  
霜おやあはるを枯る作屋し

霜後

霜 舟 松 舎 西 阜 葛 松 蕙 丘 万 里 昂 湖 霜 嶽 一 南 嶺 巢

霜 枯

冬

霜も枯るも生母の病を管の霜  
去りけり霜はあきく霜の志  
霜の志や世何内を車とあ  
舟田人のあも霜おく吐く舟  
此霜も枯るも矢判の橋の上  
霜の程も人を去りて霜の霜  
霜の志やあも霜を去りて霜  
霜の志や霜を去りて霜の志  
霜枯の志易くも霜の志が  
あも霜の志枯るも霜の志  
霜の志や霜の志枯るも霜の志

霜後

霜 舟 松 舎 西 阜 葛 松 蕙 丘 万 里 昂 湖 霜 嶽 一 南 嶺 巢

霜柱

霜花

初雪

〇十三

霜柱やけさも白なる美の情  
 畏れけしきも相や霜柱  
 手折る福の力もつら霜柱  
 名無き肉はお終はしけし霜花  
 初雪や元右庵まき米面  
 土の雪まじりたる色雪の産  
 初雪や冬をなほ冠本の  
 土の雪や冬をなほ冠本の  
 初雪や秋出けしけし霜の  
 土の雪の清きまき志賀の里

松海  
 文傑  
 米身  
 古翠  
 旭丘  
 羽人  
 蒼雨  
 松秀  
 雨芳

土の雪まじりたる色雪の産  
 初雪や冬をなほ冠本の  
 土の雪や秋出けしけし霜の  
 土の雪の清きまき志賀の里  
 初雪や冬をなほ冠本の  
 土の雪や秋出けしけし霜の  
 土の雪の清きまき志賀の里  
 初雪や冬をなほ冠本の  
 土の雪や秋出けしけし霜の  
 土の雪の清きまき志賀の里

伯夫  
 古翠  
 茅丸  
 一蕙  
 竹里  
 風毛  
 竹馬  
 夕山  
 雨夕  
 多由女  
 斗玉

冬



炉開

款も友何り當るを有 籠  
海山身押 何々々々々々  
神もさし少袖生縁や 有 籠  
物も片の肴板うけり 有 籠  
女もれはあひまう 有 籠  
嬌氣もや秋と仙と 有 籠  
嬌けけは新起あうり 有 籠  
古わもも障も附福と 有 籠  
古わも名も海もや 有 籠  
兼古のやうあ家や 有 籠  
炉新もや 柏も 有 籠

万 壺  
百 牙  
木 月  
多 女  
全  
有 席  
一 菊  
謝 堂  
日 人  
一 雨  
多 女

口切 寥

冬

炉新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠  
爐新もや 柏も 有 籠

雜 同  
一 龍  
柳 美  
桂 芳 女  
岸 鴛  
五 唄  
全  
大 梅  
一 具  
竹 子  
子 路

行燈の灯も紅くまじ針の光  
西の白雲も若も結をぬきまじ  
木枕のまはれゆく宿の音も  
下等あの上も年々暮るる  
まきまき一折の林の人の声  
は先くともとてのまきまき  
月あまも踏る白雲のまきまき  
竹中笑嬉もまきまきのまき  
行旅の道空もぬきまきのま  
まきまきのまきまきのまき  
ぬきまきのまきまきのまき

耕五女  
唐草  
羽人  
葛松  
蕙丘  
不曲  
長彦  
雨  
子之  
市石

杖の音も一と雑巾もまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
物の音もまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま  
まきまきのまきまきのま

寄谷  
溪高  
方石  
栢樹  
杉自  
碧浦  
凉荷  
夕山  
芦  
幻  
夕山



為し心内を子も掃 為さるる  
掃く身も空も解く 為さるる  
為しよふ木よとある 為さるる  
青竹の心も何故なる 為さるる  
秋の程棚もく 為さるる  
道もく板の掃く 為さるる  
為さるる掃く 為さるる  
舟の心も何故なる 為さるる  
掃く心も何故なる 為さるる  
以掃く心も何故なる 為さるる  
客人の心も何故なる 為さるる

一 布  
全 疋  
久 疋  
不 疋  
與 疋  
雨 疋  
杜 疋  
一 具  
一 樓  
一 疋  
一 疋

有秋程の掃く 為さるる  
何故なる掃く 為さるる  
掃く心も何故なる 為さるる  
以掃く心も何故なる 為さるる  
客人の心も何故なる 為さるる  
舟の心も何故なる 為さるる  
掃く心も何故なる 為さるる  
以掃く心も何故なる 為さるる  
客人の心も何故なる 為さるる

和 琴  
和 琴  
松 琴  
生 琴  
里 琴  
行 琴  
素 琴  
芭 琴  
友 琴  
尤 琴









枇杷花

ちりちりおちりりちりちりちり  
身前の芳見りやや神巻  
うきうき近き山路やわたり  
まはりあつるちりちりちり  
まはりあつるちりちりちり  
懐く入るちりちりちり  
田一牧作ぬ里や枇杷の花  
わづらひるちりちりちり  
難負多るちりちりちり  
月降るちりちりちり  
海城の柳やちりちりちり

二丘  
岸香  
文和  
五峯  
今  
二  
惟学  
木  
南  
陶  
具

陸

ハツ手花

曲電の柳替るちりちり  
枇杷咲やちりちりちり  
菖蒲やちりちりちり  
掃帚の如替るちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり

才  
謝  
一  
素  
初  
青  
涼  
秋  
篠  
松  
一  
雅

紅葉散

冬

ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちり

一  
松  
篠  
秋  
涼  
青  
初  
素  
一  
雅



枯栢

古栢を礎と爲る古栢を基  
栢中や栢の踏中世栢のワ  
栢のふむ栢を先く栢かき金  
栢かや栢あくく栢か栢の葉  
うれ栢よ味栢やくまの白ひが  
うま栢の中よ日栢は栢う栢  
かあう栢の栢う栢う栢  
栢かや栢のふま栢の衣  
栢易変まのふ栢の栢う栢  
うま栢川二まうま栢まを  
出く栢板まくたや栢栢

玉和之  
栢栢  
文海  
玄掌  
清来  
五岷  
全全  
赤莖  
文光  
丸来

〇九四

枯芦

冬

栢栢く栢栢あ栢栢うま只入ぬ  
栢かあまうまうま栢栢  
新栢ま栢あうま栢栢  
栢まうま万進ま栢の栢う栢  
栢根まの栢まか栢栢  
栢栢の栢まうま栢栢  
うま栢ま栢まうま栢栢  
外ま栢ま栢栢栢栢栢栢  
ま栢ま栢栢栢栢栢栢  
栢栢栢栢栢栢栢栢栢  
ま栢まうま栢栢栢栢

如仙  
藤雨  
篠山  
多と女  
十翁  
寸石  
涯美  
尖二  
尚古  
青岷  
警冢

草枯く及く風以從う那  
う乳着の脚み成や恰の事  
枯河や流く及くるこぞの乳  
う從草子一ま〜ま少川か  
枯草子乃粒里粒燈うけう乳  
こぞ草の根よ居凡舟の所うが  
枯草や岸〜く成るたの心  
うれ河に流もあ〜蓮子着ひ道  
枯草の粒先子や〜。後う乳  
う是草や流もえのち有ん  
若枯ぬ其を〜を割れ

榎海 古翠 魚本 稜翠 多よ女 文角 雲也 杏園 扇堂 桂草女 後陽

枯芒

枯河やち〜粒をまらあつのよ乳  
うれ草や舟よあ〜れ〜東極星  
以形舟の本を様や〜れまよ  
面よよく枯〜もぬ〜芒う乳  
候〜もあ〜ぬ爲の枯粒 草  
二形〜く踏〜く凡や河系 萩  
枯草子所あ〜く成依登う乳  
爲の草風もつ程よ枯ま〜う  
うの蓮も免〜う子ま〜や枯草  
枯蓮や舟は〜く〜夕傳  
在於よま志〜枯粉〜う〜

菅草 東川 其矣 一南 大 一 今 鼎 湖 榎海 鼎湖 草宜 葉野

冬

枯蓮 枯蔓

枯葎

枯蒜



大根曳

其後屋も高くと暮遊博覧  
生や三子ちの所より大根引  
机懐くても縁より大根引  
植枝よ書何くも女名根曳  
細中や大根提を鳥帽子就  
中う新ん肩より女大根曳  
村長う出ん子の日や大根曳  
赤うの十根より大根引  
船荷の日く浦人孔大根曳  
手近くは及し廻く大根引  
仲風を振子足あう大根引

和琴 一 橋  
一 橋  
今 萬之  
律 菜  
才 花  
一 南  
無 人  
松 秀

〇七

釣干菜

船既を待てるを大根曳  
姉より姉の美きや大根引  
二本と女を女を大根引  
二投と女を女を大根引  
及向く能く女を大根引  
ちくく男やうと大根曳  
赤の赤を女を大根引  
引提く事や大根引  
以くく女を女を大根引  
と所くもく女を大根引  
存付く少女の物干菜が

夕山 松秀  
左琴 吟霞  
一 南  
五 岨  
丁 吉  
陶 烟  
松 常  
積 常

冬



冬木立

神宗て月松子志くつ約千葉  
 田所や千葉をけく古き枯  
 冬木立葉の木もくつて名之  
 并へく梅をこきうし冬木立  
 久も佐家の作く女冬木立  
 壽く名も家と冬木立  
 修和を既も物く冬木立  
 日又や松木の先の冬木立  
 藤物ん産屋の屋松や冬木立  
 冬も實も世中も冬木立  
 冬木立と云梅よ冬木立

冬木立  
 一 舟  
 確 舟  
 長 産  
 永 号  
 陶 烟  
 鼎 洲  
 隆 園  
 寸 石  
 田 第  
 葛 之

枯野

うけ野も冬木立梅あつ冬木立  
 冬木立と冬木立の人も冬木立  
 山里の家の冬木立や冬木立  
 冬木立の星を冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立  
 冬木立の冬木立冬木立

冬木立  
 芝 葉  
 松 葉  
 之 生  
 孔 正  
 顔 正  
 才 正  
 雲 付  
 耕 雲  
 西 阜  
 羽 人  
 震 雲

冬

白鷺の足元をくぐる枯壁の  
柳も壁を枯く上りゆく二階の  
水花御も交る枯壁のそとを  
ぬぐる所のふも好るうれ壁うれ  
うねりくや壁山の傳をるの傳  
山法の杖細長交枯壁の柳  
深の横壁うくくる枯壁うれ  
赤の葉くくるとれ枯壁のむく花  
舟着くく叫んで居る枯壁の  
葉の柳もよ葉の柳うれのか  
出産く赤葉山くくる枯壁の

永系  
古尊  
高上女  
本序  
可待と  
文海  
風先  
古陸  
芽庄  
湖月  
荷乙

習うる電枯壁も一日くく  
赤の葉くく一日の葉も葉枯壁の  
以これの中く赤の葉も葉枯壁の  
紙をゆくく赤の葉も葉枯壁の  
山形も赤の葉も葉枯壁の柳  
葉の柳もよ葉の柳も葉枯壁の  
葉の柳もよ葉の柳も葉枯壁の  
葉の柳もよ葉の柳も葉枯壁の  
葉の柳もよ葉の柳も葉枯壁の  
葉の柳もよ葉の柳も葉枯壁の  
葉の柳もよ葉の柳も葉枯壁の

耕舎女  
一之  
古直  
宿堂  
一甫  
名村  
素女  
蓼雨  
五水  
茅丸  
范父



石松く傍りもさきく松の友  
母の事し蓋もとれん松の行  
松一交二夜月と人を傍ひ光  
松くあそびたよりあそび松より  
松くらん松松の節の何と月と  
如松川のさき有と松の鬼  
松も少くあそびく松くく松  
松行やあひひはあそび松を文  
松の味をさきく松の節く松  
側くも松くく松をく松は松  
松行や向松も向松は松

一 雅  
夕 山  
雲 象  
雲 竹  
文 鬼  
巨 壺  
松 舎  
川 史  
七 交  
柔 節  
松 巢

生海鼠

松行よ松松まぬ松月く松  
一疋の松をさきく松人松  
松松くく松松くく松松く松  
人と松と松くわれく松と松  
生海鼠松松くく松松列松  
三月月の松くく松生海鼠松  
松松のくく松松生海鼠松  
松松松くく松松の松松松  
生海鼠松くく松松松松松  
松松松向松くく日松松  
松松松向松くく松松松

文 之  
芦 帆  
一 竹  
芭 角  
松 傘  
有 水  
惟 字  
汀 元  
素 心  
葛 之  
青 塚

水鳥

各

有る此華んと有る又此の上  
有る女月を指する向は春  
有る女月を指する自のある  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り  
有るの山をよるく傍り

吳壺 羽人 有水 子之 連侍 丁如 寸石 雲葉 芦壺 向女

浮寐島

鴨

有る上 秋の海くや作信流  
有るの立居る女雲の船  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より  
有るの自の又も女花より

芦帆 尚古 舟席 珍菜 丁如 雲竹 文光 如仙 万里 向明 浮遊



小鸭

一 鵞 尾 子 子 於 々 小 鴨 子 飛  
 月 子 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 去 以 繩 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 何 々 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 鴨 尾 子 子 於 々 於 小 鴨 年  
 去 以 繩 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 何 々 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 鴨 尾 子 子 於 々 於 小 鴨 年  
 去 以 繩 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 何 々 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年

双 之 蓮 水 山 伯 松 杜 栗 芦  
 之 蓮 水 山 伯 松 杜 栗 芦

千鳥

松 尾 子 子 於 々 於 小 鴨 年  
 月 子 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 去 以 繩 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 何 々 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 鴨 尾 子 子 於 々 於 小 鴨 年  
 去 以 繩 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 何 々 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 鴨 尾 子 子 於 々 於 小 鴨 年  
 去 以 繩 々 々 於 於 於 小 鴨 年  
 何 々 産 々 々 於 於 於 小 鴨 年

全 札 一 雨 綿 不 高 文 全  
 全 札 一 雨 綿 不 高 文 全

星風や和國と書浦のちまを  
管上とくきくやと小松まを  
まふのゆやちれし鳴ちま  
別を當りの後先のちま  
昔やとけちま子まも結ま  
弓張の月のうさ鳴り子ま  
鳴止ま子ま夜ままま  
灯ともまぬゆまあまちま  
急山の月を限ま鳴ちま  
杉風子まを扇ままや鳴樹  
子ま鳴樹ま一まのちま

○世五

上松

去阿  
五峴  
大模  
去  
市唐  
甫自  
考星  
模海  
竹岫  
警平  
水

星の書る藩國情ま鳴まを  
何まとのみぬも極んあま樹  
官舟の帆まの所まあま  
舟はまあま揚ま鳴ま  
山風まあま吹ま中ま  
小物まままま出ま鳴ま  
岸ぬ内ままのちまま  
塔まも物のまあま鳴ま  
橋まも考ゆのままあま  
の先ままの風のまま  
伊荒のままのちま

卷

宗能  
李朗  
元陸  
川走  
長表  
木司  
榮徑  
大梅  
菊民  
雅周  
吉風



悔りやちかきこゝろをいふもあらず  
以荒の風と月影や嘆ふを  
絹川や二つに成るゝ鳴きと  
表ひてくまの戸や啼ふを  
片河の暮るまをいふを  
こゝろをいふを  
朱花の影とこゝろをいふを  
紫舟の面見送るゝを  
たゞの白の衣をいふを  
兵角屋よけのちかきを  
舟戸燈の影よけのちかき

其位  
一 面  
月 峴  
石 籠  
苦 花  
実 子  
南 庵  
の 侍  
杜 年  
涼 谷  
全

鴛鴦

吹くける雪の影や啼ふを  
岩の片く苔の影や啼ふを  
網をいふ河の影や啼ふを  
葦の葉もこゝろをいふを  
萩の影の影とこゝろをいふを  
松影をいふを  
鶯の影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを  
まゝの影や啼ふを

四 葉  
五 本  
石 籠  
葉 萩  
葉 雨  
鶯 浦  
素 如  
一 具  
亦 水  
全

鷓鴣

冬

恒福を乞ふ所の去るに於ては  
と我々の心や美事よ美事の  
船船あるは美事なり而の  
みらるるおはるる美事の上  
船も去りし少休や美事よ  
以て美事よ世に朱船の船  
去るは美事よ美事よ美事  
と我々の心や美事の去るに  
くありしよるもかぬをみる  
はよけのぬれ美事よ美事  
と我々の心や美事の去るに

横濱 栄徳 乙光 全 川 旭 権 易 所 慈 榮  
海 徳 光 全 文 丘 岩 年 洲 心 徳 徳

夜真曳 柴漬

何れも美事よ美事よ美事  
と我々の心や美事の去るに  
夕暮や一人きり人のみらるる  
お具曳や人の美事の去るに  
柴漬の船よ美事よ美事  
柴漬や女の袴の美事  
おのれも美事よ美事  
と我々の心や美事の去るに  
細代も美事よ美事  
世も美事よ美事  
と我々の心や美事の去るに

子 栄 乙 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公 公

細代守

夕

〇世七

類題十萬句集初編冬之部上終

類題十萬句集初編冬之部中

洞海舎涼谷編  
一具菴一具校合

十二月  
霜月

山里や十一月孔替古笛

多よ女

霜月や旭の雀の控長

若枝

喜他

霜月や星の光の丸ま糸

一南

霜月や極の竹の栞の株

万里

霜月よ曲里のゆる種うね

布席

霜月よ只傳のゆく山家か

一棧

木のきく霜月よのう種うね

碧浦

霜月や旭の刻く小田の雀

新氷

冬









木枯し此の所は乗や大貴  
木枯し木枯の以てなり  
風や不降く者なる言の意  
木枯や不降く者なる言の意  
風や不降く者なる言の意  
身並く木枯以て暮の工夫  
木枯し此の所は乗や大貴  
木枯や不降く者なる言の意  
木枯し此の所は乗や大貴  
木枯し此の所は乗や大貴

兼氏  
今  
大貴  
一具  
文海  
菖蒲  
呂舟  
山笑  
素白  
古川  
竹林  
言死人  
松竹  
吟處  
西布  
二丘  
大梅  
一蓋

雪

冬

木枯し此の所は乗や大貴  
木枯し木枯の以てなり  
風や不降く者なる言の意  
木枯や不降く者なる言の意  
風や不降く者なる言の意  
身並く木枯以て暮の工夫  
木枯し此の所は乗や大貴  
木枯や不降く者なる言の意  
木枯し此の所は乗や大貴  
木枯し此の所は乗や大貴

上七  
山笑  
素白  
古川  
竹林  
言死人  
松竹  
吟處  
西布  
二丘  
大梅  
一蓋



物も生く飛く 空の空  
も中く十日空ぬよ松空  
松の空一松片くよ落よりく  
松もれん空とく又空も空  
又使も松くも松ぬの空  
空密も空よの空 松 物  
物代より風情も空や空の松  
松空の空は松る月日か  
松く空の空も空あく日の松る  
生空の空も空の中の空も松空  
松の空空空く空空の空

喜 子 文 古 古 務 蕉 二 占  
及 井 光 空 空 我 丘 晶 燈

七くも松ぬぬ空の松子く礼  
は空の空あくくく松の空  
空あくく松の空あくく松の空  
空松の空あくく空の口  
生く空も空の空も空の空  
空の空や空の空の空空射来  
松くれて空くくく空の空  
松の空も空も空くく松の空  
空の空も空も空の空も空  
松も空の口松も空の空も空  
松も空くく松も空の空

不 不 不 古 忍 古 幕 典 今 今 大  
曲 侍 化 空 空 母 空 空 費

竹あや 暮れまゝして雪の香  
月一風物もま交り雪の日はあ  
花の香もま交り けしきもあや  
暮れまゝして雪の香 松竹あや  
雪の香もま交り けしきもあや  
一日の世にけしきもあや けしきもあや  
大雪の香もま交り けしきもあや  
けしきもあや けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや

全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一  
全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一  
全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一  
全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一

秋の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや  
雪の香もま交り けしきもあや

全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一  
全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一  
全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一  
全 杜 全 一 松 自 蓬 松 一

竹の雪梳し修るのあり  
一時や六十好ある雪あふ  
雪の折もや打切ぬ暮は晦の客  
手を伸べて雪をくもく秋の雪  
雪の降やまぬ入るのうも  
雪降やよる年の秋あり  
よの向に秋は月もほし雪の屋根  
雪ちるや庭よ小松ありま物  
持宿をく芦折きくはく雪  
屋根の雪の積りぬ戸口か  
湯の煮えもゆきぬ雪の積りか

雪 文海  
多 高  
等 谷  
四 明  
全 壱浦  
抱 琴  
お 系  
松 巢  
杜 其

うけんあく油をほくや雪の白  
みとひが折花あや雪のくれ  
人形より雪の舞うぬ雪の音  
雪の屋根をく低のまけくまひ  
四季の色も薫る雪の音  
袖の雪消く折也戸口れ  
月雪の雪より雪の音を降埋む  
降止く月も雪より雪の音  
一折の雪をさく雪の音の折  
秋の雪送く人よあく雪の音  
雪の音もあく雪の音山あり

白 起  
何 年  
荷 了  
耕 雪  
松 竹  
松 月  
呉 洋  
芦 直  
木 架  
全  
桂 香

ちよとくくと千能を掃や門の雪  
 何うかして居らんやうと松の雪  
 雪の音を押やにやうと雪の音  
 雪の目眩いつくも雪の音  
 横河を車てふはくは雪の音  
 似舞の蛇物さうにや雪の音  
 一群よ小を押しさう雪の音  
 秋半の雪片羽振打通るさ  
 雪の日の終りくも雪の音  
 雪山の雪をえくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音

一之  
 全  
 新水  
 思文  
 古川  
 芝菜  
 一竹  
 芭角  
 落平  
 石籠  
 友之

一新て日の暮りみくも雪の音  
 雪の音を掃やうも雪の音  
 煙出りの雪を掃りくも雪の音  
 大雪よ易い末うも雪の音  
 雪の掃りや雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の中よ雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音  
 雪の音を掃りくも雪の音

全  
 丈二  
 末公  
 全  
 多よ女  
 二丘  
 全  
 全  
 全  
 五  
 全  
 不系

冬



ほきく雪を憶いけけの雪  
舞舞の雪と舞り雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
舞く舞雪を舞いけけの舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞

多由女  
布席  
全  
應く  
大梅  
田兼  
全  
竹池  
双二  
赤葵  
文鬼

雪吹

雪を舞い出さぬ舞の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞  
雪の舞いけけの雪の舞

原谷  
眉蕉  
南陽  
右拳  
古翠  
五峴  
全  
全  
孔乙  
病乙  
桂葉女



氷る松や雪籠のたつ橋の上  
暖のうらあつもあま氷うら  
氷る白や松よりあつ谷の家  
氷る松や以て物まゝ倉卒子  
氷る赤女何処やう月の廣く成  
一ひきの梅迄氷る姿う飛  
氷る松や松より下るのあはし  
葉の氷抱ひて這入戸口う乳  
夏有角屋のつゝ掃く氷うな  
あま松より氷るま遠を登きまん  
氷る赤女氷の橋より松のあま

大梅  
赤象  
羽人  
水仙  
今水  
不依  
萬葉  
尺葉  
吟霞  
一蕙

氷る松や雪籠のたつ橋の上  
暖のうらあつもあま氷うら  
氷る白や松よりあつ谷の家  
氷る松や以て物まゝ倉卒子  
氷る赤女何処やう月の廣く成  
一ひきの梅迄氷る姿う飛  
氷る松や松より下るのあはし  
葉の氷抱ひて這入戸口う乳  
夏有角屋のつゝ掃く氷うな  
あま松より氷るま遠を登きまん  
氷る赤女氷の橋より松のあま

後梅  
小圃  
然崇  
草張  
雪野  
謝堂  
古秋  
柳樹  
文来  
赤谷  
石堂



柱板をく実刺して形水う形  
松見をく内子物う女首の光  
蓋汁の層也膚の水う乳  
信をく年児のまきあく物う  
明女の面を二布子水う  
吹をく子格子のこゆる物うな  
第一目の信子物う女這入口  
四五子の形あや確のああり  
山風のまきんく物う物う  
水う万乳をく陽屋の這入口  
考の又見をく他の水う形

女鬼  
松自  
一之  
夕山  
委子  
全  
左形  
木公  
今高  
文二  
尚古

鐘水  
氷柱

霰

而結をく竹標水う且う形  
戸明をく氷の光う自形  
物うまぬをくちをく物う  
持をくる夕をく戸回の信う  
手強をく物一の先の信う  
おをくるま形の水柱の長う  
物うまけの氷柱をくや光母を  
涌う程掃て思うく物う  
玉をく扇形をく信う  
蓋をくまをく委子信をく  
一いつの算をくく物う

全  
一  
素  
雜  
双  
然  
瓶  
古  
有  
蓋  
岩



冬雨

と物さるやるよよは思のふまふ  
爽まや初よ子のたれる白の信  
る市のわけは度し雲陣一  
厚轉のやうに強く雲が  
掃除しと物さるは度し冬雨  
物さるよよ思て出さる冬雨  
庭木も判るはあさる冬雨の句  
飯の白は向る巨燧の句  
真まると境目のあまふ冬雨の句  
やると出れはあさる冬雨の句  
娘傍と一日出れはあさる冬雨の句

一 冬  
亦 石  
作 了  
湖 月  
冬 燧  
一 松 常  
田 善  
古 陸  
棟 々

巨燧

物さるよよ思て出さる冬雨の句  
活毛の白は向る巨燧の句  
加茂川も傍りよ思て出さる冬雨の句  
心まよふよ思て出さる冬雨の句  
情さるよ思て出さる冬雨の句  
と森初と厚初は度し冬雨の句  
掛とよ思て出さる冬雨の句  
海光素の秋は度し冬雨の句  
怯面も思て出さる冬雨の句  
気も思て出さる冬雨の句  
娘花屋の素も思て出さる冬雨の句

冬 燧  
一 具  
小 園  
茶 新  
亦 石  
一 飛  
双 二

冬







自りて来りて投出ん者や樽の  
傳人のちと疾ひ片ふる樽を  
糸を子何れか出や樽の  
偏をを来りて樽より向く  
右左の障りも床へ樽の  
糸のしすも来りて樽の  
後へ樽を向くや樽の  
樽をて樽の床や樽の  
右左のしすも来りて樽の  
樽のしすも来りて樽の

多の女  
野棠  
一具  
何年  
一寄  
甫石  
友之  
寛里  
五况  
全  
素也

炭

鉄地を投出ん者や樽の  
炭の馬や子も来りて樽の  
糸のしすも来りて樽の  
よのしすも来りて樽の  
糸のしすも来りて樽の  
炭の馬や子も来りて樽の  
糸のしすも来りて樽の  
よのしすも来りて樽の  
糸のしすも来りて樽の  
炭の馬や子も来りて樽の  
糸のしすも来りて樽の  
よのしすも来りて樽の  
糸のしすも来りて樽の

節之  
耕  
羽人  
二晶  
糸  
全  
一  
小  
子  
年

冬

川の壁を傷て起りて  
撰くして焚くはなるや炭の屑  
炭碎く是の屑の末より  
うけとるも男世帯や  
炭屑ととも煙るや柿の種  
も縁炭より出たり  
焼くは炭の煙り際  
炭屑の煙り  
炭竈や老る平  
炭竈は鬼を掃出に  
炭竈や焼くは

桂香  
左琴  
川長  
二晶  
柿木  
土の地  
真路  
薪水  
一具  
一之  
芦月

炭竈

炭焼

炭俵

火桶

新凡や世一竈も  
背戸山や古  
炭焼の  
炭中  
手と  
手  
松  
張  
古

寸石  
涼谷  
無林  
水  
一水  
一蕙  
夕山  
多  
暮  
年  
尺

冬



冬至梅

坐あらんよきあはる梅也相を梅  
去りあより下坐しあらんを梅か  
梅也やほく廻らん相を梅  
梅具の丸の手持ふを梅か  
年あをい老角若も成を梅か  
あくしてさるを梅一ツよを梅  
梅くくあももくくを梅  
梅の糸初くぬくを梅  
梅ももぬくぬ目もを梅  
梅の梅あもく大くくを梅  
梅もぬくぬくを梅

一具  
狸巢  
然菜  
荷乙  
杏園  
弓所人  
四筆  
十冠  
風毛  
水氷  
梅森

雪山を梅あももあや梅  
梅の梅一ツあももあよく  
梅もくと去花のあや梅  
入おの梅も梅よ梅の梅  
梅もあよと豆角なり梅  
梅もあよとふ梅や梅  
梅もあよとく梅を梅  
梅もあよとく梅を梅  
梅もあよとく梅を梅  
梅もあよとく梅を梅  
梅もあよとく梅を梅  
梅もあよとく梅を梅

梅山  
唯花  
尺景  
文呂  
縹平  
芎子  
丁知  
白起  
昭眉  
芭角  
秋望



冬牡丹  
 有仙や梅木移し響る家  
 有仙は山にむく和尚が  
 有仙や枯るる菊も持て見  
 有仙や梅も子濡し花の香  
 水仙や紫ひそき菊の種丸  
 一場り菊も入ん有仙を  
 有仙や梅子も移る家 雀  
 有仙も入るる花を山に所が  
 有仙や菊の松も移 梅  
 梅人か菊よ移るる牡丹  
 梅子の世を待たぬや有牡丹  
 古翠  
 西菊  
 梅海  
 松常  
 陶烟  
 菊海  
 秋登  
 一南  
 梅海  
 松常  
 真及

葱

根深  
 生姜搦  
 暖鳥  
 大少もらん可人や有牡丹  
 古翠や梅も並ひし葱畑  
 葱も有るや菊も入るる  
 葱移る物の数し葱も移  
 葱移るる花の中を通る花  
 古葱や忘れし一板白の上  
 葱の香の一味花も小松花  
 有の上は菊も移る松常  
 生姜あり菊のあり菊も白  
 梅も入るる菊も有る  
 梅も入るる菊も有る  
 梅も入るる菊も有る  
 梅も入るる菊も有る

冬

鷹  
鷹狩  
鷹野  
冬鳥

ゆはれてうらみもなほ暖る  
ゆゑのりかもある暖る  
木を斬すく飛たうぬあなる  
身振ひも空のふれう暖る  
ゆゑある思ふ人も只惜し  
うらみもあつた人へも  
岩山や切とを過る鷹の  
助鷹の狩さうけく鷹の  
鷹の地や暮る人へ鷹の  
杉も杉木もあつた鷹の  
ゆゑとて強く恒林やあなる

玉和久  
應く  
古翠  
文鬼  
稲香  
涼海  
素心  
五况  
桂葉安  
芦帆  
涼谷

王子酒  
納豆

鷹野の住人へ納豆の  
市仕持さるるの中や玉の  
椀のゆき影のゆきや納豆  
よお人のようく好く納豆  
あつたのゆきや納豆  
是より納豆のゆきや納豆  
魚のゆきや納豆  
ゆきや納豆  
肴のゆきや納豆  
納豆のゆきや納豆  
納豆のゆきや納豆  
納豆のゆきや納豆

全  
柳  
素心  
木水  
松香  
方石  
節之  
松美  
吟友  
友之  
素心

冬

揚毛後子書さるく納豆が 素白

鳴付く、志く乳も志るを素一把 氷 瓶

娘く子産當せさるる玄牝分 全 真 直

在河原をゆく出さる女并く支 全 真 直

木くろけく一坂通れく乳が 全 吐 香

さる乳も志るを素一把 吐 香

類題十萬句集初編冬之部中終

類題十萬句集初編冬之部下

洞海舎涼谷編 一具菴一具校合

極月 極月や一宿のまも素さる 三 桃

師走 山も乳も志るを素一把 文 光

海原も師走の果や日の影 素 光

積りゆく梅あけく在河原 多 香

人並子師走の市を通り 大 貴

とく素さる女産の志る師走 多 香

赤裳ゆかり師走の梅さるを 新 香

素梅の裾さるゆかり師走が 行 光

臘八 衣配 車納 菜喰

月子あれた月子あれた月子あれた  
松梅咲く十香立佛を  
子乳荒を子乳荒を子乳荒を  
割月の廻りのる陸を  
襪ハヤ三尺積る陸の空  
襪ハヤあま宿の積る空を  
衣配物子はるる海老の積  
衣配宿の羽をのん松梅を  
蓬生六梅よはくよ了松梅  
梅をるぬ人よはくよ了松梅喰

芝菜 芦帆 五岬 戴星 宇高 戸山 多毒 松梅 多毒 孫山

佛名會 寒入

燈火のあつてもあつてもあつても  
某々のほつてもほつてもほつても  
今宵切くくくくくくくくくく  
一人片々あつてもあつてもあつても  
仙名や隣くわける雲南を  
寒の入り目をあつてもあつてもあつても  
是れはくくくくくくくくくく  
娘入の伴寝ひくくくくくくく  
雲の戸の時や燈火のあつてもあつてもあつても  
寒入やあつてもあつてもあつてもあつても  
雲林を寒のあつてもあつてもあつてもあつても

菓平 積聚 若菜 右拳 雨考 一南 名村 五岬 碧滴 一南 雲珠

寒雨

春の傳もやまの雨に  
志せぬ東海乃や春の雨  
ちや春の春の春の春の  
田畑の雨に春の雨  
春の雨や春日の雨の  
春の雨や春の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の

梅海 隆因 易年 多よ女 雨行 旭 葛松 模海 雨明 ちうま 菜蕪

寒声 寒月

春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の

桂香 涼谷 子孫 文海 蓬草 一竹 一陽 龍化 一具 松香 草井

寒念佛

冬

春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の  
春の雨の雨の雨の

草井









冬 蠅

冬の山麓を流るる水に  
影も亦く見れど此の如く  
赤穂特々たる水も亦く  
松の木の葉も亦く  
細の尾も亦く  
初物も亦く  
枯木折れ  
松の木の葉も亦く  
冬山の麓を流るる水に  
影も亦く見れど此の如く

南丹  
一 南  
今 涼谷  
古 翠  
小 圃  
乙 老  
素 五  
易 手  
初 燈

冬 山

冬 日

冬の日も亦く見れど此の如く  
影も亦く見れど此の如く  
赤穂特々たる水も亦く  
松の木の葉も亦く  
細の尾も亦く  
初物も亦く  
枯木折れ  
松の木の葉も亦く  
冬山の麓を流るる水に  
影も亦く見れど此の如く

山 燈  
二 丘  
宇 弘  
久 藏  
山 燈  
吟 處  
橋 海  
橋 翠  
一 雪  
水 氷  
点 燈

冬 田

節 季 候

冬

冬の日も亦く見れど此の如く  
影も亦く見れど此の如く  
赤穂特々たる水も亦く  
松の木の葉も亦く  
細の尾も亦く  
初物も亦く  
枯木折れ  
松の木の葉も亦く  
冬山の麓を流るる水に  
影も亦く見れど此の如く

水 氷  
点 燈

煤掃

昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく

多由女  
 布席  
 史子  
 古陸  
 里月  
 月露  
 回葉  
 南山  
 左末  
 旭丘  
 松秀

昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく  
 昔の昔のの附南りくく

樞  
 上葉  
 如  
 芽谷  
 抱琴  
 素  
 一竹  
 全  
 五  
 一南  
 写飛人

冬



年尾

年の尾やふ二子居りし時の電

貞雄

橋上へ櫓もとれ紙借る紙

橋海

と紙や持紙屋の裏の所り

若依

一甫

行年

行とや礼子傳る初初り文

一湖

行とや古さの礼基田川

棋海

ゆく年の早ぬそるぬ壁の字

棋海

りともやへ稀ぬまのちと稀

一湖

初年やまよ初る年の若

一具

初と礼市や何苦ふ市の非

疎谷

りともま多森志と名果穀分

雨空

年宵

熱刺しとあそびあそび年の

今鳥

年一夜

法をそぬ子海の出るやと一

一

惜年

日礼高る植移くやまじ世年

一

親二人持と初と一惜とる空

王月

年名残

梅よとや追とまると礼名残が

玄く

年別

五三の娘ととととととととと

易年

年暮

死く心ととととととととととと

妹和

子年ととととととととととと

布席

美人の薨る事ととととととと

岳妹

集めりてととととととととととと

千輪

手もとや海先者る格とととと

柁琴

桂木野の石ととととととととと

杜賞

冬

大晦日

除夜

厄拂  
掛取

岡見

旅人の袴上りや 大晦日  
 傳のあは陸少や 大晦日  
 廣あふれとあふふや 大晦日  
 大竹の身もも入る除夜の鐘  
 冨くけき居るもも入る除夜の鐘  
 袴あはく除夜の白ひや 大晦日  
 人より除夜の以替りぬ除夜の風  
 傳のあはととと取らる厄拂  
 掛取よ軍書をもひん義送  
 うけよ子んてん除夜の小書  
 居る程善く雪掃 是れ

李朗  
 高よ女  
 寸居  
 兀号  
 顔老  
 吉陸  
 小志  
 南石  
 大費  
 一南  
 五岨

寄彼

春隣  
春待

春近

年内立春

冬題不知

松の松真を隣りよ特とて  
 待真のふぬはつるのあつた  
 えつと向もつるよとて待  
 人並よ真まのふとよとて  
 ちる待や一松の松のあつた  
 くのそや月一葉とて真  
 真とつとあつとつとつとつ  
 雛子つとや若果あつとつ  
 鶯一葉と枯木とつとつ  
 えんもあつとつとつとつ  
 萩若葉の外あつとつ

川文  
 榎海  
 松常  
 玄く  
 小蓬  
 五竹  
 素蕊  
 碓嶺  
 柳鳩  
 竹岫  
 赤川

冬鳥の羽さうもろうとく 柳火打  
西月の来りもむかひ 昆布あう  
暮ら子躑く 草や 老る冬  
山姥をかかへも老るのちうとく  
松木の智と枯き 杜若う  
葉中の竹枯を何し 柳の枝  
秋意をらん 是も風程の冬  
枝ありを先きく 雲や 鈴杵  
田舎の女や 雨や 降ゆれ  
鳴鴨のあうとく 暮る 柳の  
はく 伊の岩松のまや 冬の流れ

不流 忍雪 泉池 一蕙 若水 素石 一雅 栗笑 夕山 友之

松茸の柳さうとく 笠の冬  
まよや人 暮る 木のまよ 暮る 妻

葛之 玄く

小暮の法よ 家内 出さく 孤小春が  
石臼の春さうとく 冬への入  
人暮るのちうとく 降や 柳の雪  
引ぬのち 柳よとく 大松の  
松の田北 五とく 小暮の  
末 暮る 集る 友や 暮る 残の  
雪 掃の 出れ 竹の 雀うれ  
吹雪く 冬 暮る 木のまよ

秀和 柏雅 水竹 今 玉葉 今 甘水



袴も出たは袴も芒や荊の中  
 既〜あ〜りの雉子や雪解り  
 儀梳も掛まぬ菴や時自唐  
 室〜又〜あ〜しを焚松葉が  
 川上の星〜つゆ〜鴨の亭  
 山里も袴の孔多〜を籠  
 志〜や海の破風は乳齒  
 江の上の弓張舟や鴨の亭  
 白鞘の刀き〜一〜老のこ  
 中〜上〜袴元〜り〜春〜乳  
 家板〜多〜居〜香〜の中〜也〜博〜也

其水  
 去文  
 今  
 管  
 今  
 乙  
 今  
 幸  
 今  
 美  
 今  
 石

志〜乳〜と〜〜〜日の照山路が  
 志〜掃〜も〜乳〜飯〜あ〜の仕〜り〜乳  
 情〜む〜乳〜藤〜お〜子〜来〜也〜大〜海〜日  
 志〜あ〜り〜の〜こ〜〜〜〜〜〜〜〜小〜志〜氏  
 伴〜よ〜い〜方〜何〜あ〜〜〜〜〜〜〜  
 裾〜く〜あ〜お〜終〜〜〜〜〜〜〜  
 中〜於〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
 情〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
 志〜人〜一〜通〜小〜崩〜や〜槽〜明〜  
 田の畔の草ま〜袴を袂せ〜  
 志〜荒〜の〜由〜板〜を〜穿〜る〜小〜春〜

今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今  
 今

儂くはゆきを折きや空の如  
 馬人の子れ素足の内や素柱  
 山雀の来ぬ只今〜空の空  
 引舟の横は石のりまの如  
 風や海の〜ゆ〜陸の春  
 冬〜と眼よ〜や。物言馬〜  
 大の子れ重うしやや素の如  
 市於りぬ細〜ゆ〜枝の空  
 冬〜と〜用〜の〜と〜く〜は〜煙出羽江  
 全 全 乙 全 全 全 全 全 全

類題十萬句集初編冬之部下終

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助蔵版俳書目録

○類題之部

俳諧發句五百題	春秋庵白雄房撰	小本二冊
同 新五百題	田喜庵護物撰	小本二冊
同 新々五百題	全撰	全三冊
同 名所千題集	全撰	全三冊
同 今人東風流	洞海舎涼谷撰 貝庵一具撰	全二冊
同 十萬句集	全撰	全四冊
同 故人五百題	松露庵撰	小本一冊
同 續故人五百題	一具庵一具撰	全二冊

俳書目録



嵐雪句集 一稱玄峰集

其角句集 次高文成集

蓼太句集

吏登句集

巢兆句集

完來發句集

梅翁宗因發句集

太無發句集

存義發句集

獅子眠發句集

全二冊

全二冊

全一冊

全一冊

全一冊

全二冊

全二冊

柳居發句集

糶粒瓶 甲斐沖丸集

葛里句集 遠白山集

護物七部集

乙二七部集

饒舌錄 元木綱大入書

三吟未來記

俳諧寐志 春秋庵白旗

今七部集 冬至庵康年撰

今人附合集 永木園校

全一冊

全一冊

全一冊

全一冊

全二冊

全一冊

全三冊

全二冊

全四冊

芳草集

同

芦の心

田喜庵

全二冊

○季寄之部

戀の棗

春雪庵北元著

小本二冊

俳諧手挑灯

一名俳諧燈

中本二冊

同 掌中小本

全一冊

俳諧袖鏡

寸珍一冊

季寄便覽

一枚揃

俳諧通言

横本一冊

俳諧通言

小本一冊

○文之部

新編俳諧文集

あはれうたのふりかへ

全一冊

俳諧變躰一覽

両面一枚揃

袖之規

表俳諧定坐變躰之圖

七款集々の外古俳諧の變化のありさまを、  
ていねいに記述の自由を一目でみるべし

俳諧礎

○掌中寸珍物

俳諧寸珍物

掌中五百題初編

集初

同 二編

集二

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
芭蕉發句集	其角發句集初編	嵐雪發句集初編	乙由發句集	夢太發句集初編					
三編	二編	三編	二編	二編					
集冊三	集冊五	集冊六	集冊七	集冊八	集冊九	集冊十	集冊十一	集冊十二	
編	編	編	編	編	編	編	編	編	

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
新五百題初編									
一編	三編	古今撰	猶追々出刊						
集冊一	集冊十六	集冊十六	集冊十六	集冊十六	集冊十六	集冊十六	集冊十六	集冊十六	集冊十六
編	編	編	編	編	編	編	編	編	編

俳諧一葉集  
 同 溥用摺  
 續今人五百題 涉壁為山輯  
 掌中故人五百題 松露菴主人著

前編五冊  
 後編四冊  
 全五冊  
 全二冊  
 全一冊

芭蕉公羽略傳常水府 幻窓湖中編輯 附錄 西卷野集校合 全一冊

近世俳諧十家類題集過日庵祖鄉輯 全一冊

同 名家類題集同 著 全二冊

續結尾花集義庵辨領著 全二冊

類題狹義集雜之部同 輯 全二冊

諸國名家集笠松素行輯 安房之部 諸國追々出版 全二冊

古今五百題寸珍本 全四冊

俳諧獨替古 全二冊

俳諧道の便 全二冊

俳諧戀の禁 全二冊

三都

發行

書林

京都三條通榭屋町 出雲寺 文次郎

大坂心齋橋北久太郎町 喜兵衛

同 安堂寺町 屋 太右衛門

同 博勞町 屋 茂兵衛

江戸芝神明前 屋 嘉七

同 日本橋通二町目 林新兵衛

同 同 山崎屋 佐兵衛

同 通壺町 原屋 茂兵衛

同 淺草須原町 伊八

同 須原町 伊八

同 本石町十軒店 六助藏板

同 下谷柳成道 英藏



須



